中国の文化IX第２回

殷代

漢字の誕生

文字は人類がことばを記録するために発明した最初の装置である。

文字の誕生によって人類は時間や空間を越えて、ことばを伝えることを可能にした。

中国で発明され、やがて東アジアの共通文字となった漢字はいつごろ誕生したのであろうか。

今回は中国最古の漢字である甲骨文字と、その発見によって実在が確認された殷王朝、さらにその研究に従事した研究者たちのドラマについて紹介する。

マテオ・リッチ（一五五二～一六一〇）

イエズス会士。イタリア生。ローマ学院で数学、天文学を学んだ後、東方伝道を志し、一五八二年に澳門に到着。優れた中国語力と科学知識によって中国の人々の尊敬を集め、一六〇一年には北京で明の万暦帝に拝謁し、北京在住と中国全土におけるキリスト教布教の許可を得た。

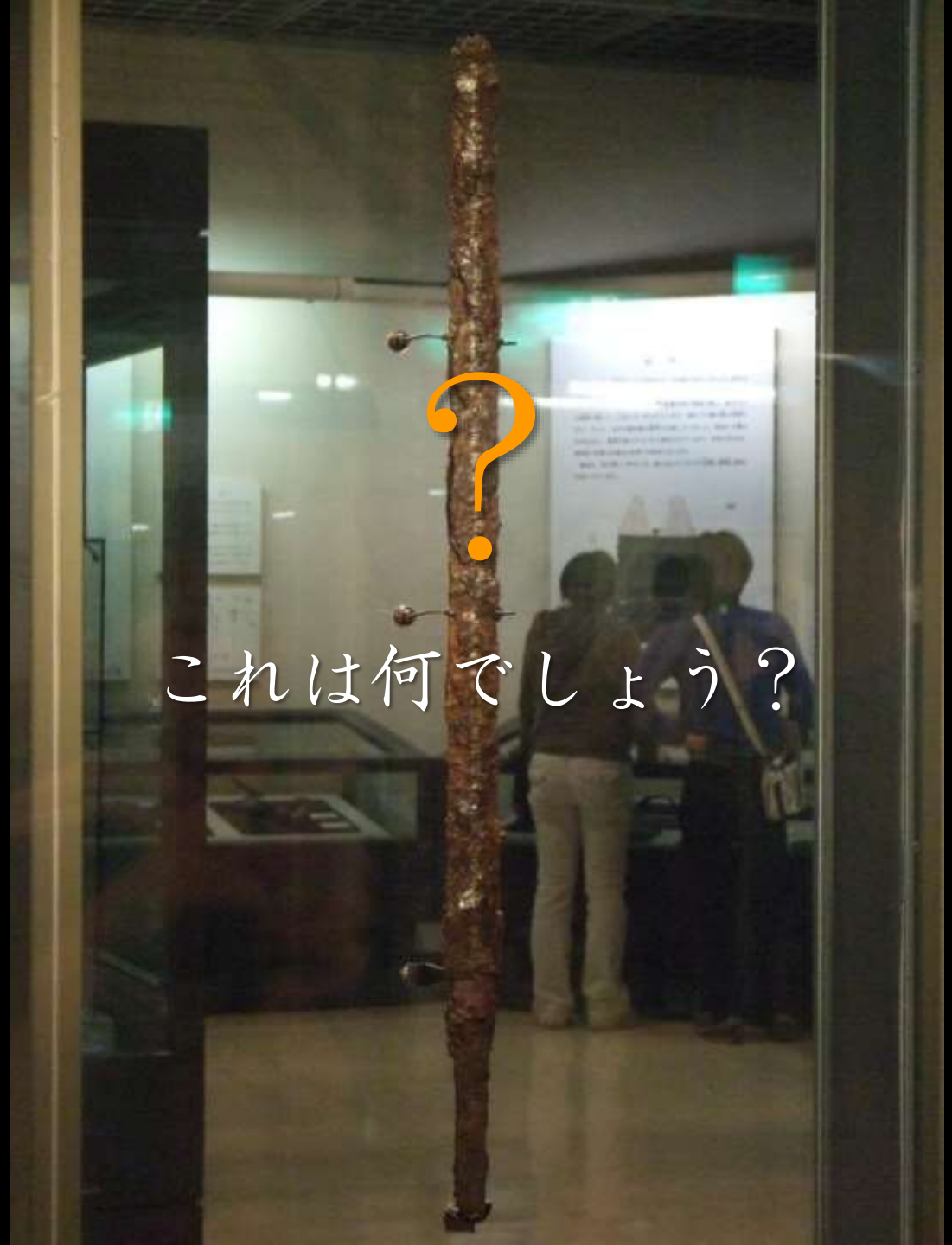
彼はイエズス会への通信の中で、漢字について次のように記している。

この文字を使う国民は、たとえ非常に言語の異なった国民の間でも、みな文字や書物を介して相互に理解できるということです。西洋の文字ではこうは行きません。それだから日本とシャムと中国は、それぞれ別個の大国で、言葉もまたまったく違っているのですが、相互理解が非常によく行なわれ、同じ文字が各国で使われているようです。

マテオ・リッチ通信一五八三年二月十三日

平川祐弘『マテオ・リッチ伝１』

（東洋文庫一四一、平凡社、一九六九年）


？
これは何でしょう？

金錯銘鉄剣（埼玉県行田市）

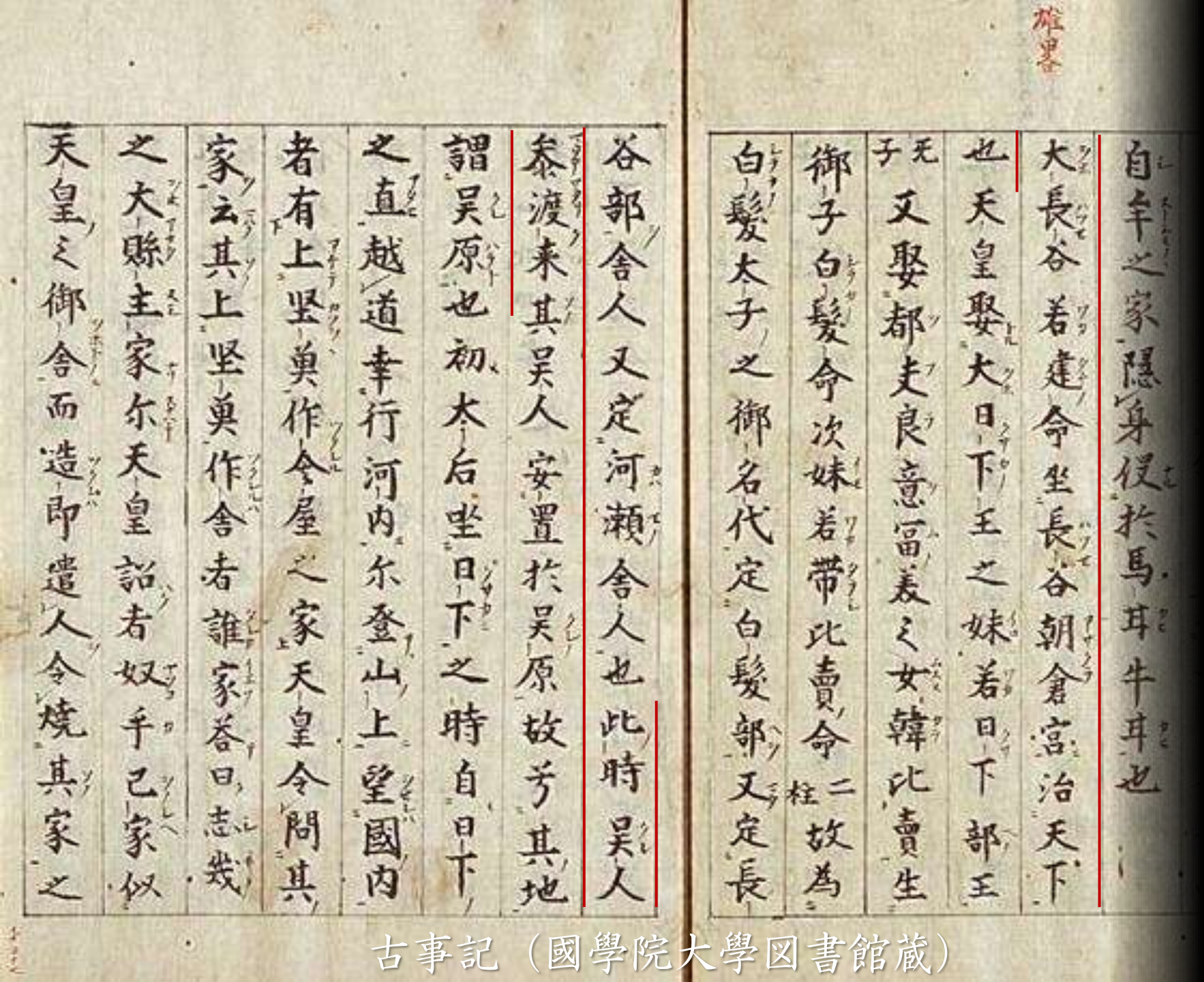
金錯銘鉄剣

一九六八年に埼玉県行田市の稲荷山古墳から出土した全長七十三・五センチの鉄剣。十年後、保存処理の過程で表に五七字、裏に五八字の計一一五字の漢字の銘文が確認された。銘文には「辛亥年（四七一？）七月中記す」とあり、ヤマト王権の雄略天皇に比定される「獲加多支鹵（ワカタケル）大王」の名が刻まれていた。

中国に誕生した漢字は、どのように日本へ伝えられたのだろうか。

『古事記』雄略天皇記

大長谷の若建（ワカタケル）命、長谷朝倉の宮に坐し、天下を治む・・・・此の時、呉（中国南朝宋）の人、参り渡り来りぬ。其の呉の人を呉原に安置す。故に其の地を号して「呉原」（現奈良県高市郡明日香村栗原）と謂う。



自年之家隱身伏於馬耳牛耳也
大長谷若建命坐長谷朝倉宮治天下
也天皇娶大日下王之妹若日下部王
无子又娶都夫良意富美之女韓比賣生
御子白髮命次妹若帶比賣命二柱故為
白髮太子之御名代定白髮部又定長
谷部舍人又定河瀬舍人也此時呉人
參渡来其呉人安置於呉原故号其地
謂呉原也初太后坐日下之時自日下
之直越道幸行河内尓登山上望國内
者有上坐奠作舍屋之家天皇令問其
家云其上坐奠作舍者誰家荅曰志幾
之大縣主家尓天皇詔者奴乎己家似
天皇之御舍而造即遣人令焼其家之

古事記（國學院大學図書館蔵）

突厥
悦般
高車
烏孫
亀茲
袁紇
柔然（蠕蠕）
555亡
高車
烏洛侯
夫餘
勿吉
高句麗
新羅
倭
百濟
任那
契丹
庫莫奚
高昌
敦煌
鄯善
姑羌
吐谷渾
白蘭
氐
羌
トボット
Tubut
ヒマラヤ山脈
カナウジ(曲女城)
カーマルーパ
KAMARUPA
マガダ
サマタタ
Samatata
平城
洛陽
建康
北魏
386～534
朝
南
宋
420～479
朝
齊
(479～502)
平壤
漢山
熊津
大峴山
牢山
泰山
襄陽
江陵
長沙
成都
建寧
始安
臨漳
龍編
南海
南康
晉安
臨海
永嘉
會稽
鄞縣
宣城
錢塘
毛人

呉原（現奈良県栗原）

金錯銘鉄剣（埼玉県行田市）

漢字の誕生と伝播

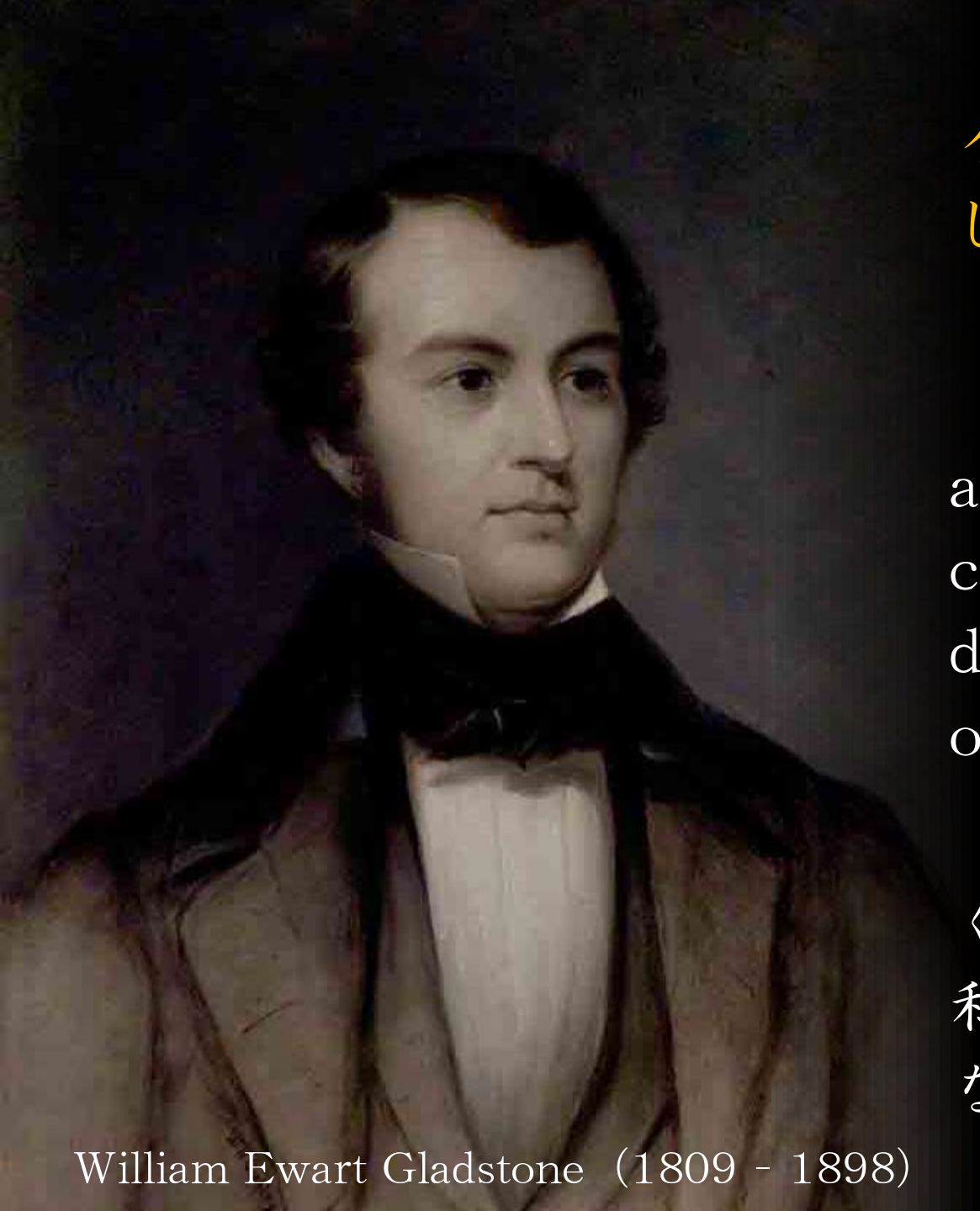
漢字の誕生は、中華文明を発展させたばかりでなく、その伝播は、言語を異にする東アジアの諸民族に漢語という共通語（Lingua Franca）を与え、それを基盤とする文明圏の成立と高度な精神的交流を可能にした。

東アジアの文明の発展の基礎となった漢字であるが、十九世紀、「西欧の衝撃」によって中国が弱体化すると、漢字とそれを生み出した中国文明への批判が起こるようになった。

西洋の衝撃(Western Impact)と漢字

明から清へと四百年あまりにわたって続いた海禁政策によって、中国は政治、科学、教育、軍事などの面で、ヨーロッパに大きく遅れをとることになった。

一八四〇年、イギリスの麻薬密輸に端を発した第一次アヘン戦争は、清朝側の敗北に終わり、東アジアの国々に大きな衝撃を与えた。



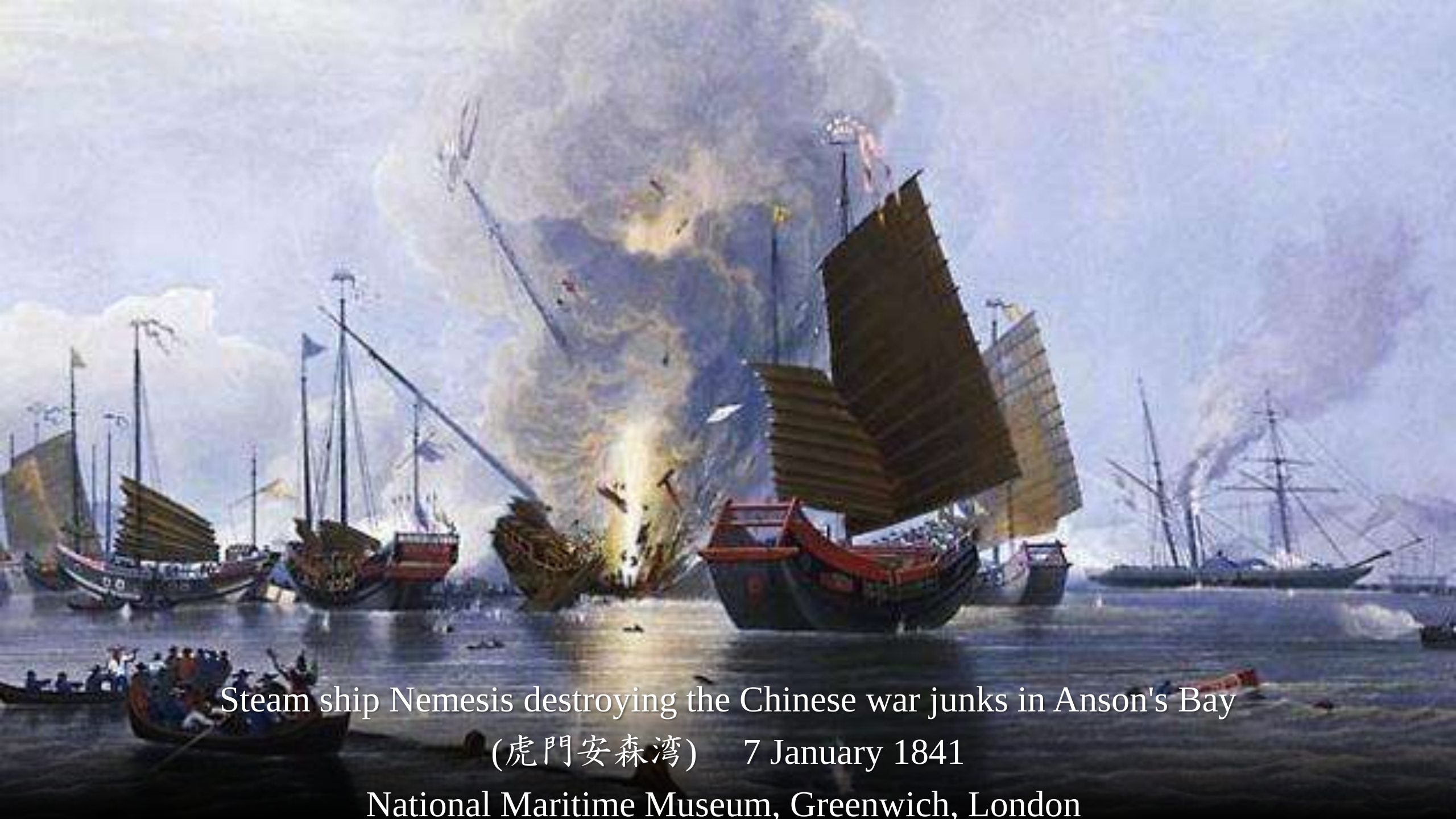
William Ewart Gladstone（1809 - 1898）

イギリスの国会でアヘン戦争に反対したグラッドストンの演説

1840年2月

“A war more unjust in its origin, a war more calculated to cover this country with permanent disgrace, I do not know, and I have not read of… ”

その原因がかくも不正な戦争、かくも永続的に不名誉となる戦争を、私はかつて知らないし、読んだことない。



Steam ship Nemesis destroying the Chinese war junks in Anson's Bay
(虎門安森湾)　7 January 1841
National Maritime Museum, Greenwich, London

中国の弱体化を見た日本人の中には、その原因が漢字の使用にあるとして、漢字廃止論を唱える者もいた。

写真はその代表的な人物だが、これは誰か？

前島密（一八三五―一九一九）

〔解説〕

前島密は天保六年（一八三五）、新潟の豪農の家に生まれた。江戸で洋学を修めた後、幕臣前島家の養子となると、慶応二年（一八六六）、教育普及のため、幕府に「漢字御廃止之儀」を献策した。

維新後は明治政府に出仕し、イギリス留学後、日本の近代的郵便制度の創設に尽力。政変により一時政府を去るが、明治二一年（一八八八）、逓信次官として官界に復帰、電話事業の創始に携わった。

漢字廃止論

國家の大本は國民の教育にして、其教育は士民を論ぜず國民に普(あまね)からしめ、之を普からしめんには成る可く簡易なる文字文章を用ひざる可らず。……　然らば御國に於ても西洋諸國の如く音符字（假名字）を用ひて教育を布かれ、漢字は用ひられず、終には日常公私の文に漢字の用を御廃止相成候様(あいなりそうろうやう)にと奉存候(ぞんじたてまつりそうろう)。

前島密「漢字御廃止之儀」（一八六六年）

脱亜論

〔解説〕

明治維新によって近代化を実現した日本では、アジアの国々と袂をわかち、西欧列強と行動をともにすべきとの議論が起こる。

脱亜論

我日本の國土は亞細亞の東邊に在りと雖も其國民の精神は既に亞細亞の固陋を脱して西洋の文明に移りたり。然るに爰に不幸なるは近隣に國あり、一を支那と云ひ、一を朝鮮と云ふ。此二國の者共は一身に就き又一國に關して改進の道を知らず、交通至便の世の中に文明の事物を聞見せざるに非されども耳目の聞見は以て心を動かすに足らずして其古風舊慣に戀々するの情は百千年の古に異ならず。

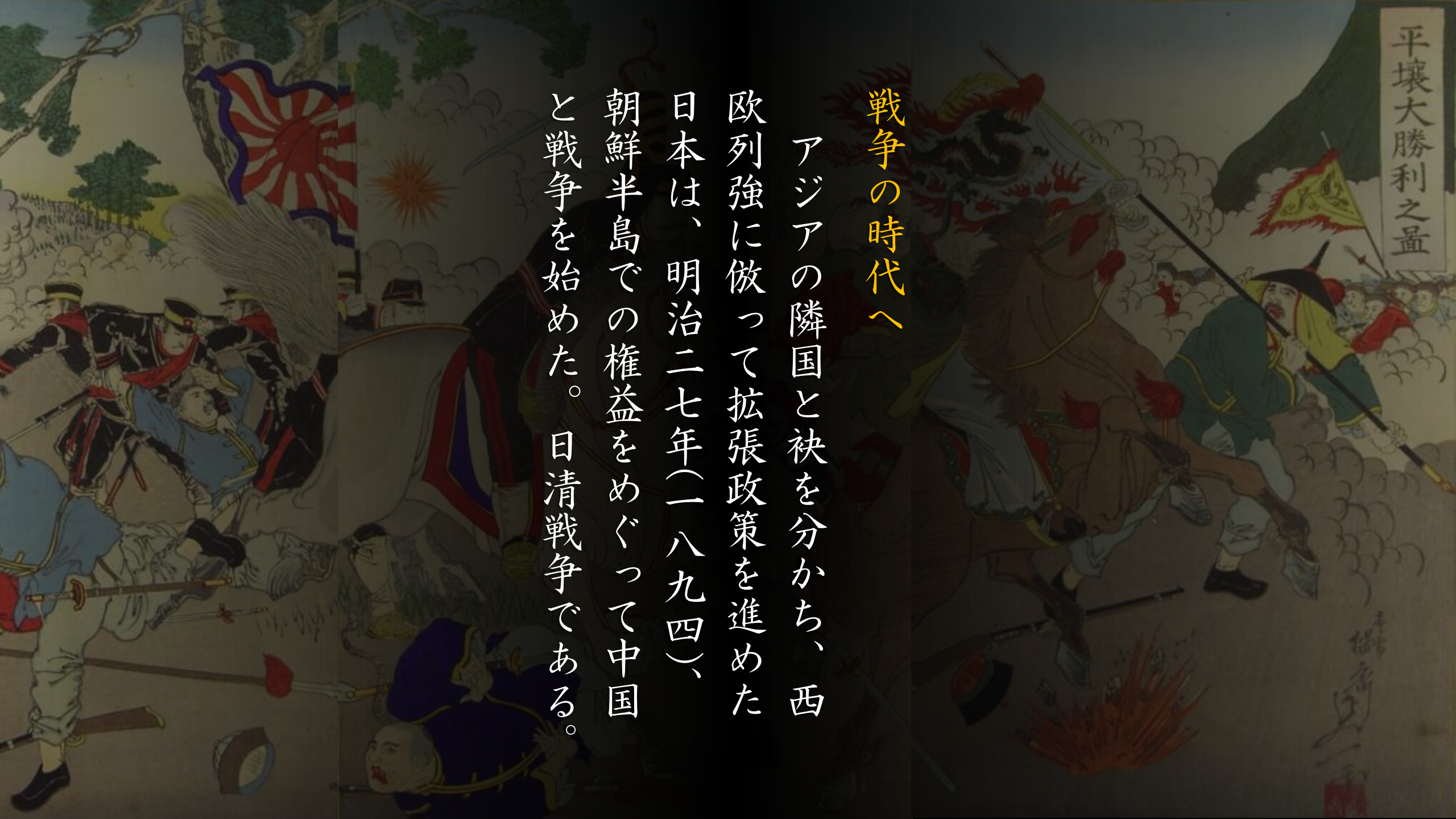
福澤諭吉「脱亜論」（明治十八年（一八八五））

脱亜論

左れば今日の謀を爲すに我國は隣國の開明を待て共に亞細亞を興すの猶豫ある可らず。寧ろ其伍を脱して西洋の文明圏と進退を共にし、其支那・朝鮮に接するの法も隣國なるが故にとて特別の會釋に及ばず。正に西洋人が之に接するの風に從て處分す可きのみ。

惡友を親しむ者は共に惡名を免かる可らず。我れは心に於て亞細亞東方の惡友を謝絶するものなり。

福澤諭吉「脱亜論」（明治十八年（一八八五））



戦争の時代へ

アジアの隣国と袂を分かち、西欧列強に倣って拡張政策を進めた日本は、明治二七年(一八九四)、朝鮮半島での権益をめぐって中国と戦争を始めた。日清戦争である。

日清戦争の主戦場となったのは朝鮮半島であった。
「平壤大勝利の図」（日清戦争錦絵、野田市立興風図書館蔵）

日本の連合艦隊は清の北洋艦隊との黄海海戦に勝利し、制海権を獲得した
「帝国艦隊、威海衛に於いて敵艦を撃沈す」（日清戦争錦絵、野田市立興風図書館蔵）

明治28年(1895)、下関で講和条約が結ばれ、戦争は日本の勝利に終わった
「講和談判の図」（日清戦争錦絵、野田市立興風図書館蔵）

白鳥庫吉（1865～1942）

アジア蔑視の広がり

〔解説〕

日清戦争に勝利した日本は、さらにアジアへの蔑視を強め、その風潮はやがて学問の世界へも広がっていった。

白鳥庫吉（1865～1942）

白鳥庫吉の中国古代史批判

東京帝国大学教授の白鳥庫吉は、明治四二年（一九〇九年）、東洋協会講演会で「支那古伝説の研究」と題する講演を行い、漢学者が信奉していた中国古代の聖王・堯舜禹の史的実在を否定した。

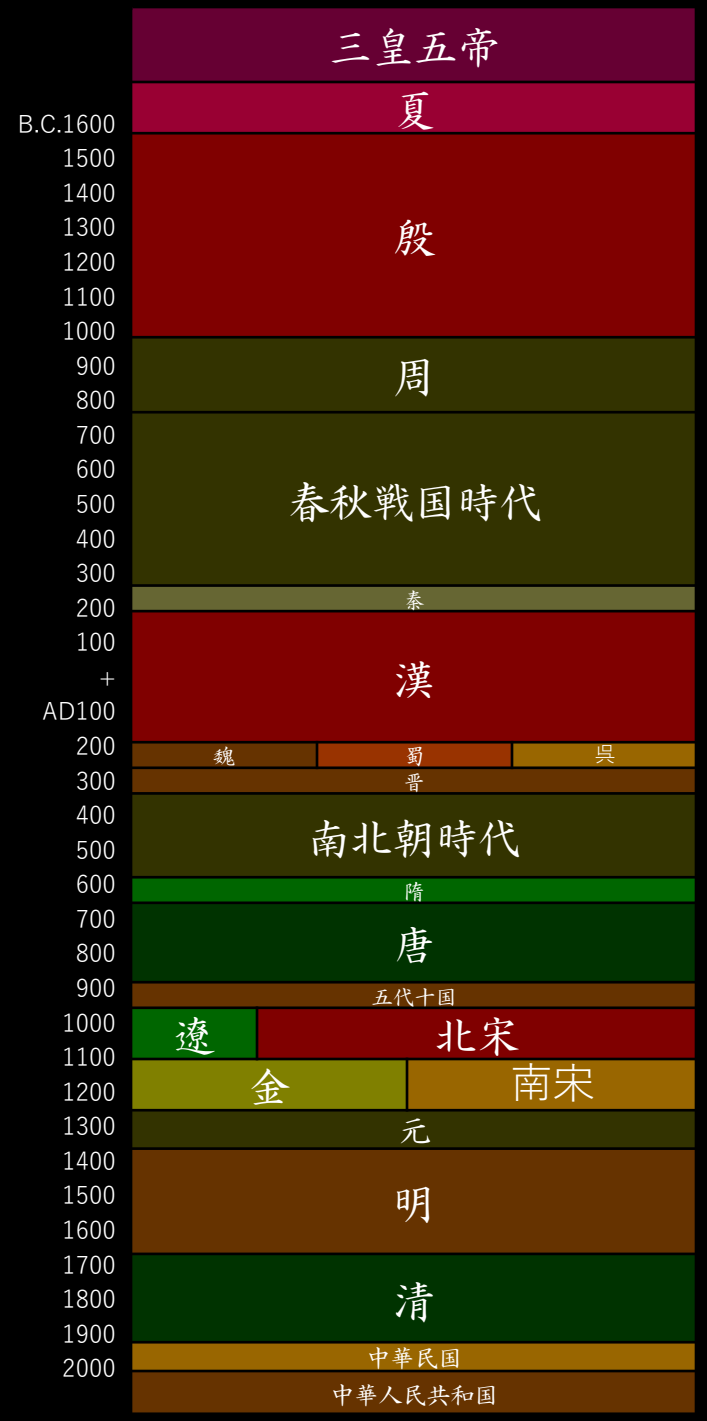
白鳥庫吉『支那古代史の批判』（全集八巻所収）

白鳥庫吉（1865～1942）

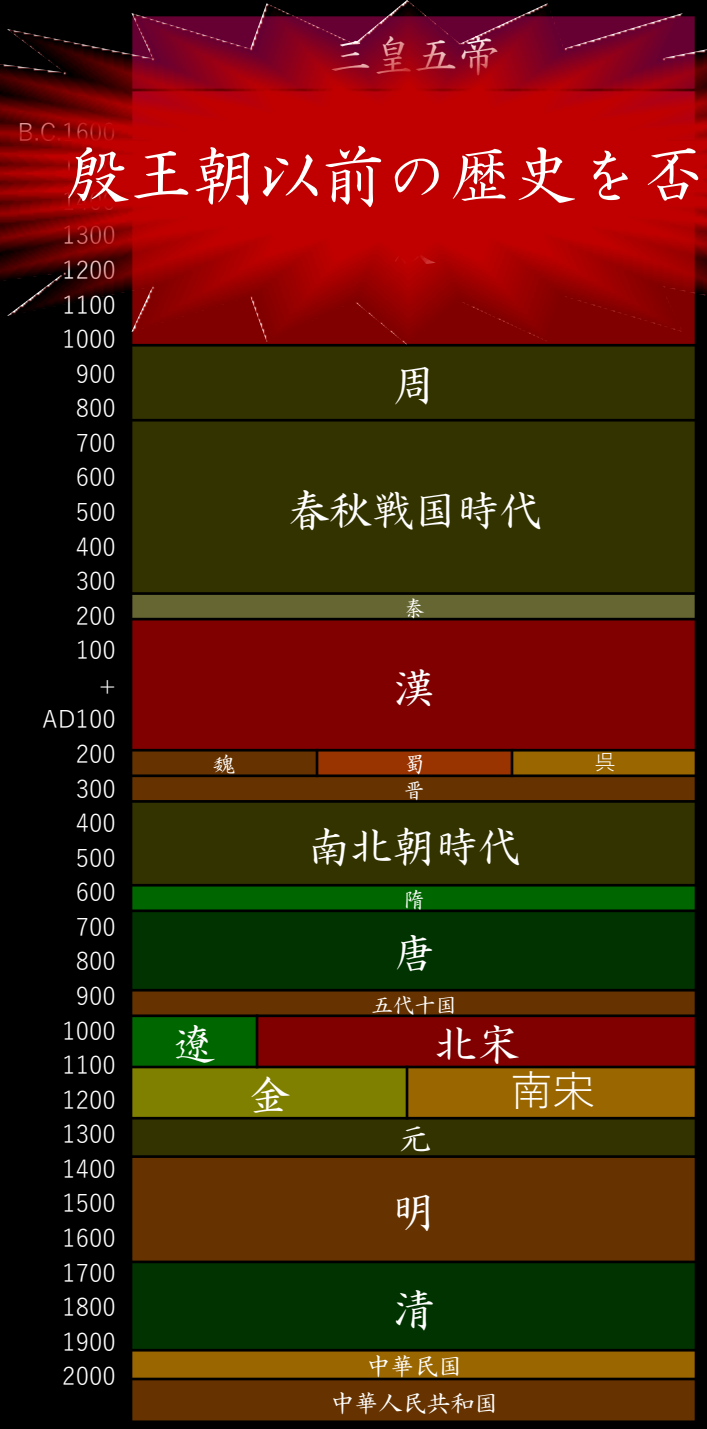
中国古代史批判

「堯舜禹の三帝をはじめ、夏后氏及び殷代の歴史として今日記録に伝えられたものは、悉く假作の物語であって、之を實際の歴史と認めることは出來ない」

白鳥庫吉『支那古代史の批判』（全集八巻所収）


三皇五帝
夏
殷
周
春秋戦国時代
秦
漢
魏
蜀
呉
晋
南北朝時代
隋
唐
五代十国
遼
北宋
金
南宋
元
明
清
中華民国
中華人民共和国
B.C.1600
1500
1400
1300
1200
1100
1000
900
800
700
600
500
400
300
200
100
+
AD100
200
300
400
500
600
700
800
900
1000
1100
1200
1300
1400
1500
1600
1700
1800
1900
2000

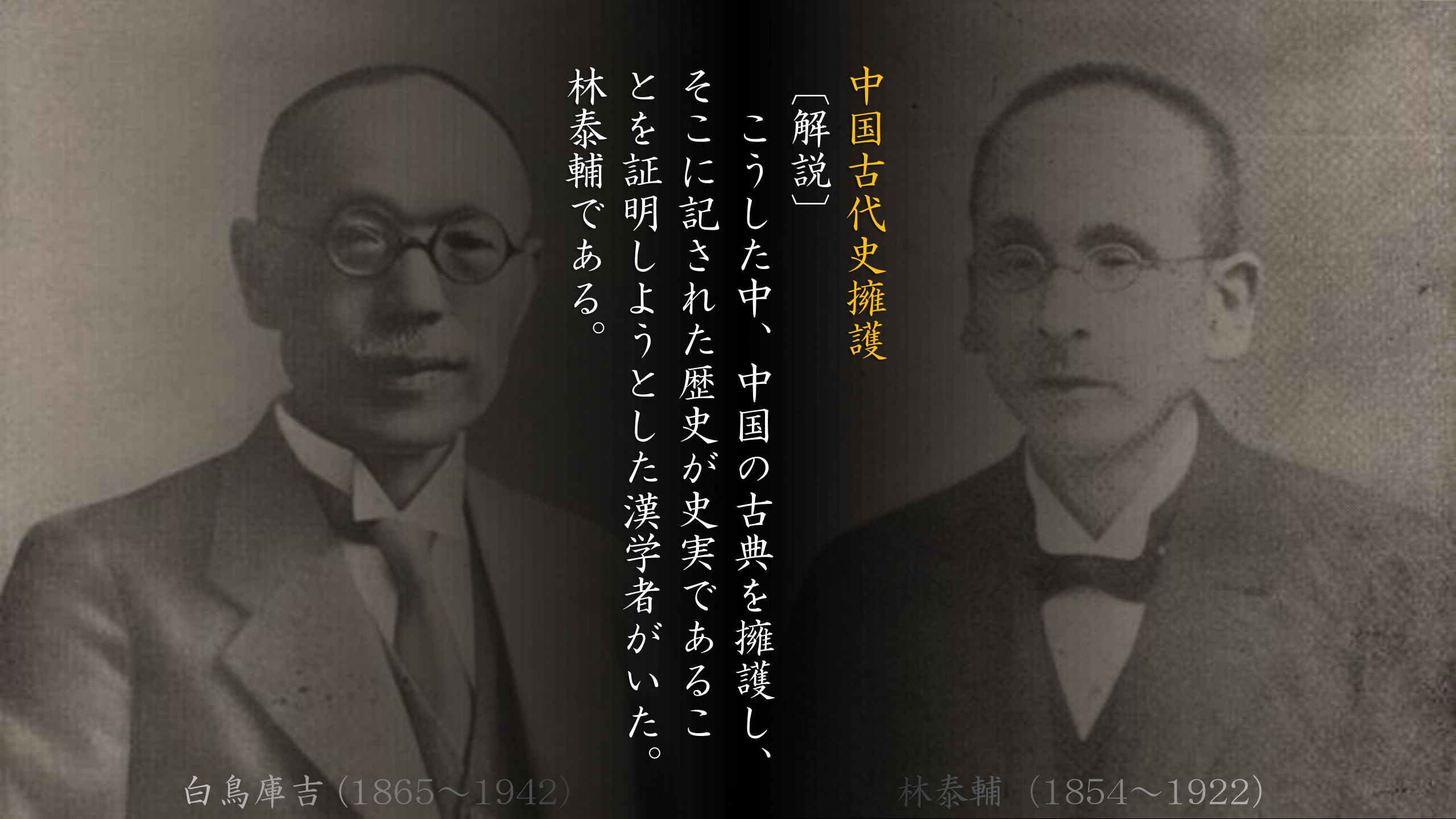
殷王朝以前の歴史を否定



中国古代史擁護

〔解説〕

こうした中、中国の古典を擁護し、そこに記された歴史が史実であることを証明しようとした漢学者がいた。林泰輔である。



白鳥庫吉（1865～1942）　林泰輔（1854～1922）

講義内容

第一節　殷王朝は実在したのか
　　～中国古代史をめぐる漢学者と東洋学者の論争

第二節　甲骨資料の発見
　　～殷王朝の実在を証明した古代文字

第三節　殷墟の発掘
　　～現代によみがえった古代王朝

第一節

殷王朝は実在したのか

中国古代史をめぐる
漢学者と東洋学者の論争

白鳥庫吉（1865～1942）　　林泰輔（1854～1922）

林泰輔（一八五四～一九二二）

〔解説〕

林泰輔は安政元年（一八五四）、千葉県に生まれた。郷里の漢学者・並木栗水から清朝の考証学を学び、明治二〇年（一八八七）、東京大学古典講習科漢書科を卒業した。

明治四一年（一九〇八）、東京高等師範学校教授となり、大正一一年（一九二二）、同校在任中に没した。

林泰輔（1854～1922）

学友が語る林泰輔の人物像

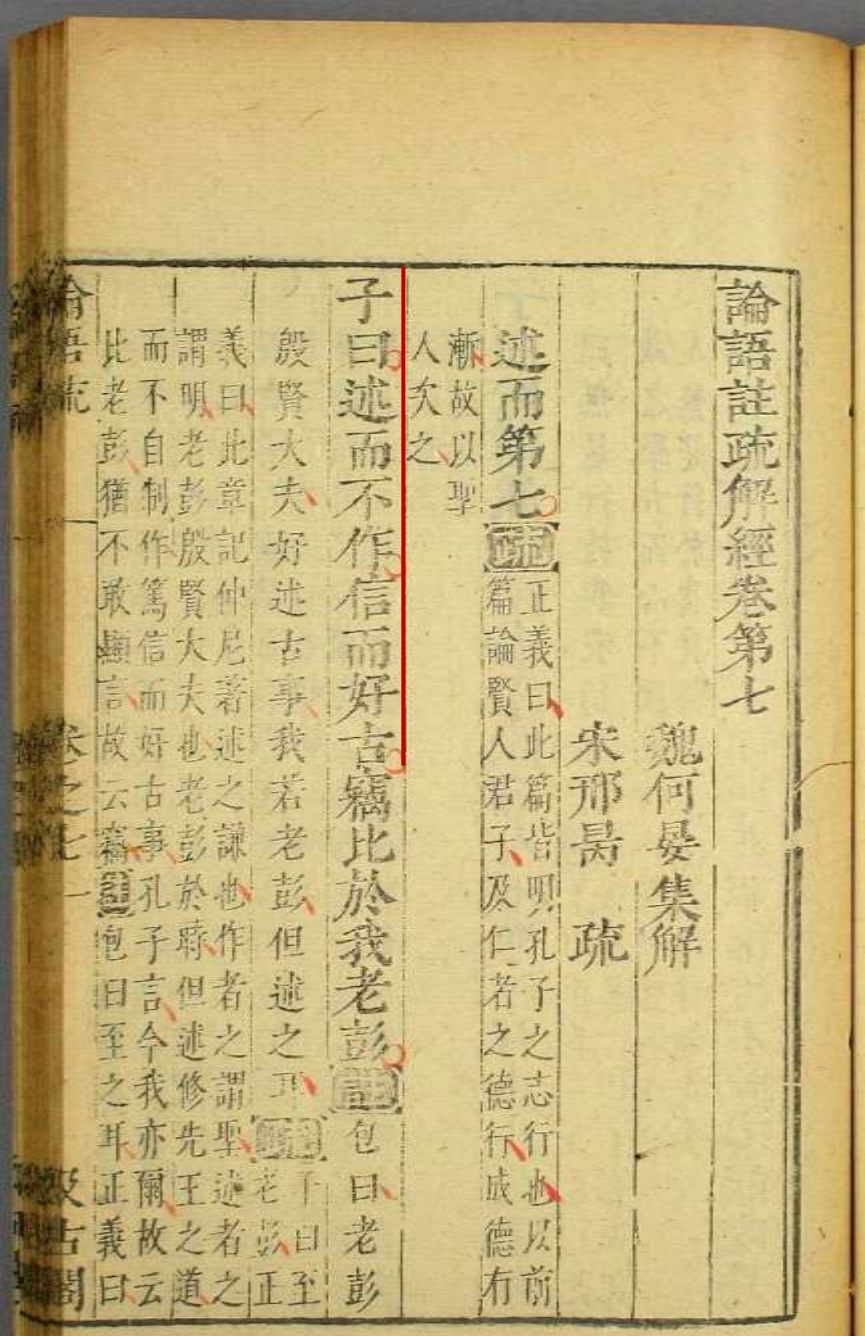
酒を飲まず、烟草を吸はず、碁も打たず、将棋も指さず、書画骨董も好む所なく、学校の講席に臨む外は、終日端座して机に対ひ、書を読み筆を執りて余念なかりしは、亡友林浩卿博士の日々の生活なり。

瀧川亀太郎「『支那上代之研究』序」

【解説】

瀧川亀太郎は『史記会注校証』の著者。林とは学生時代に寝食を共にした学友だった。

林泰輔（1854～1922）


論語註疏解經卷第七

魏何晏集解

宋邢昺疏

述而第七

正義曰此篇皆明孔子之志行也以前篇論賢人君子及仁者之德行成德有漸故以聖人次之

子曰述而不作信而好古竊比於我老彭

包曰老彭殷賢大夫好述古事我若老彭但述之耳

子曰至老彭正義曰此章記仲尼著述之謙也作者之謂聖述者之謂明老彭殷賢大夫也老彭於祿但述修先王之道而不自制作篤信而好古事孔子言今我亦爾故云比老彭猶不敢顯言故云竊

包曰至之耳正義曰

漢学者たちが学んだ孔子の教え

子曰、述而不作、信而好古

私は事実を伝えるだけで、勝手な創作などはしない。むかしの人が伝えたものを信じ、それを大切にしているだけだ

（論語述而第七）

白鳥庫吉（1865～1942）

白鳥庫吉（一八六五～一九四二）

〔解説〕

白鳥庫吉は慶応元年（一八六五）、千葉県茂原市に生まれた。

東京帝国大学文科大学史学科で、当時二十代だったリースからヨーロッパの科学的歴史研究法を学ぶ。

卒業後、学習院教授、東京帝国大学教授、東宮御用掛などを歴任。京都帝国大学の東洋学者・内藤湖南とともに「東の白鳥庫吉、西の内藤湖南」と並び称された。

Ludwig Riess（一八六一～一九二八）

〔解説〕

ルートヴィヒ・リース。一八八〇年、ベルリン大学に入学し、史料の科学的分析による近代科学としての歴史学を確立したランケ(Leopold von Ranke 一七九五～一八八六)に学ぶ。

一八八七年(明治二〇年)、二六歳で東京帝国大学に講師として招かれ、一九〇二年(明治三五年)まで一五年間、ヨーロッパの科学的歴史研究法を伝えた。

白鳥庫吉（1865～1942）

白鳥庫吉の中国古代史批判

〔解説〕

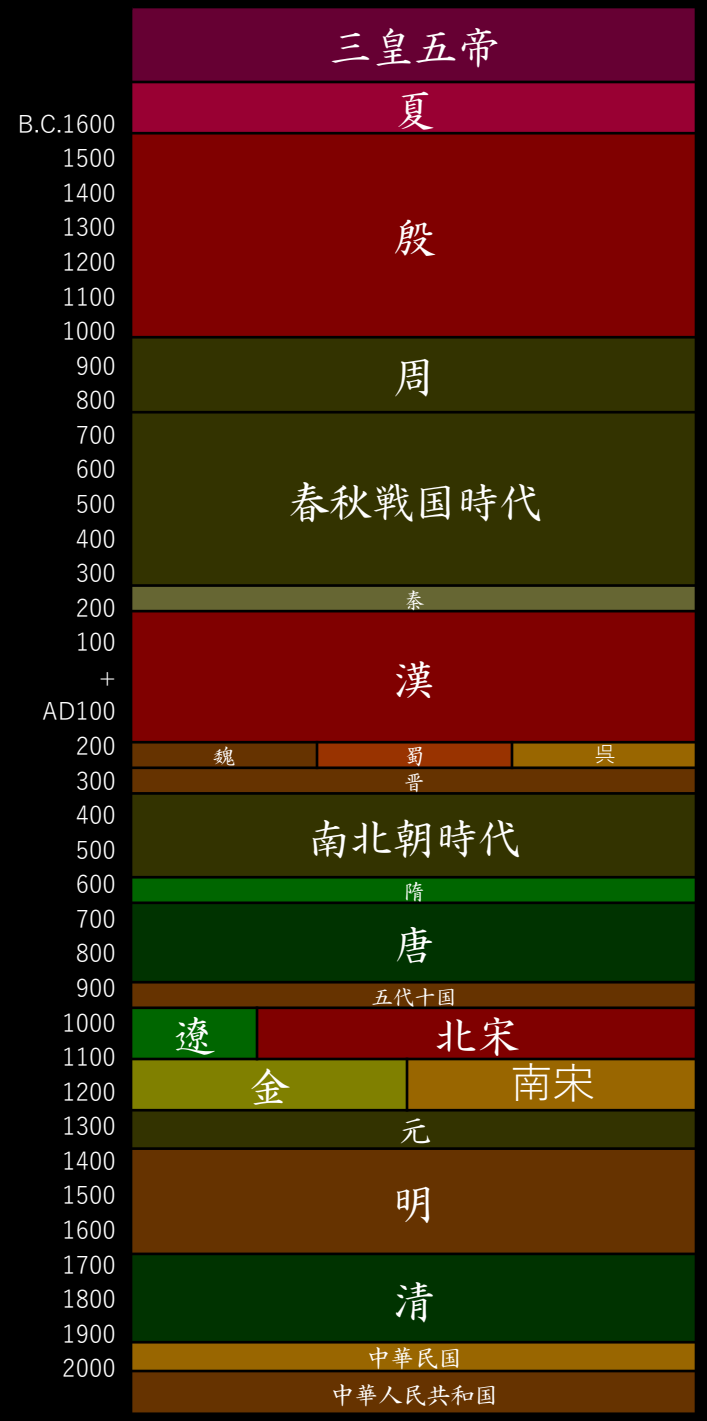
幕末に少年時代を過ごし、伝統的な漢学を学んだ林泰輔とは異なり、若くしてヨーロッパの科学的歴史研究法を学んだ白鳥庫吉にとって、中国の古典が伝える古代史は、単なる伝説に過ぎず、これを史実と認めることはできなかった。

白鳥庫吉（1865～1942）

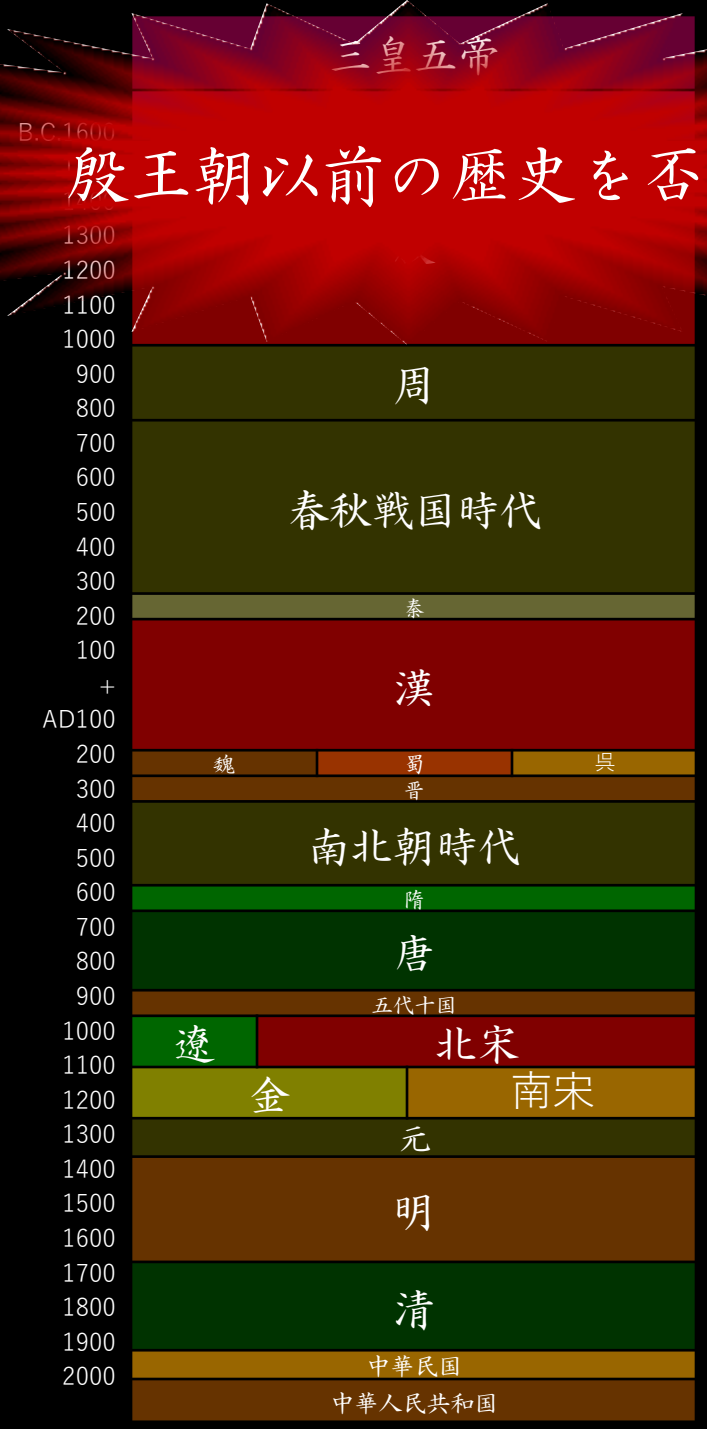
白鳥庫吉の中国古代史批判

「堯舜禹の三帝をはじめ、夏后氏及び殷代の歴史として今日記録に伝えられたものは、悉く假作の物語であって、之を實際の歴史と認めることは出來ない」

白鳥庫吉『支那古代史の批判』（全集八巻所収）


三皇五帝
夏
殷
周
春秋戦国時代
秦
漢
魏
蜀
呉
晋
南北朝時代
隋
唐
五代十国
遼
北宋
金
南宋
元
明
清
中華民国
中華人民共和国
B.C.1600
1500
1400
1300
1200
1100
1000
900
800
700
600
500
400
300
200
100
+
AD100
200
300
400
500
600
700
800
900
1000
1100
1200
1300
1400
1500
1600
1700
1800
1900
2000

殷王朝以前の歴史を否定



林泰輔の反論

〔解説〕

一方、漢学者である林泰輔にとって、中国の古典が伝える古代史を虚構と唱える白鳥の説は、到底容認できるものではなかった。

白鳥庫吉が明治四二年（一九〇九）、「支那古伝説の研究」と題した講演で堯舜禹の実在を否定すると、明治四四年（一九一一）から大正元年（一九一二）にかけて「堯舜禹抹殺論に就て」と題する論文を四回にわたって発表し、白鳥に反論した。

林泰輔（1854～1922）

堯舜禹抹殺論論争
白鳥庫吉（1865～1942）
林泰輔（1854～1922）

林泰輔の反論

〔解説〕

しかし林泰輔の反論は、中国の古典を妄信するだけの儒者流とは一線を画すものであった。

彼は物証に基づく実証的な方法によって、中国の古典が伝える古代史が虚構ではないことを証明しようとした。

林泰輔（1854～1922）

林泰輔「堯舜禹抹殺論に就て」

周代以前に於ていかなる時代の存在せしかといふに、唐といひ虞といひ夏といひ殷といふものありしことは、尚書その他左傳、史記等の諸書の傳ふる所なり。

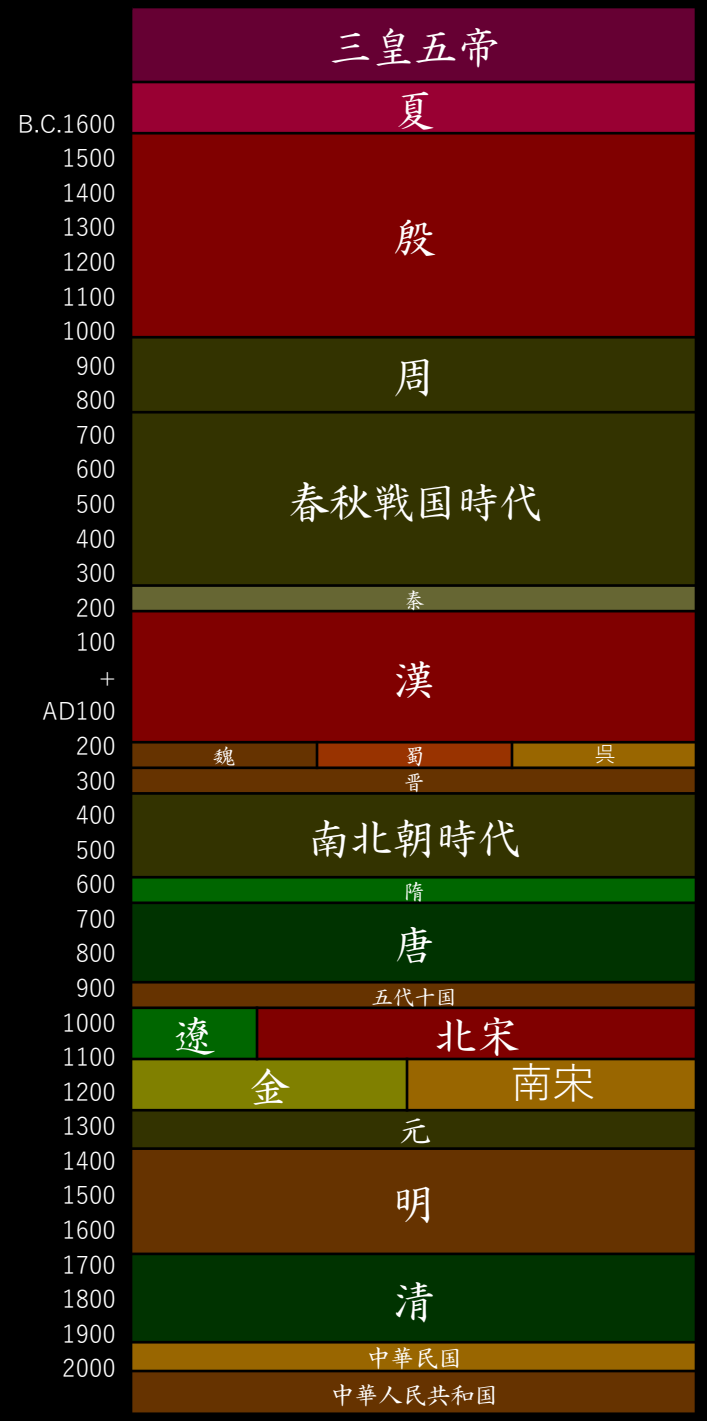
而してこの説の然否を確かめんとせば、書籍以外の實物に就て研究するより善きはなし。

林泰輔（1854～1922）

林泰輔「堯舜禹抹殺論に就て」

たゞ周代以前の研究材料となすべきものは從來世に知られたるもの、僅に古銅器の類に過ぎざれども、その古銅器にして、これまで殷器と稱せしもの、果して殷器なりや否や、他に正確なる傍證のあらざる限りは、容易に信じ難きものなり。

林泰輔（1854～1922）


三皇五帝
夏
殷
周
春秋戦国時代
秦
漢
魏
蜀
呉
晋
南北朝時代
隋
唐
五代十国
遼
北宋
金
南宋
元
明
清
中華民国
中華人民共和国
B.C.1600
1500
1400
1300
1200
1100
1000
900
800
700
600
500
400
300
200
100
+
AD100
200
300
400
500
600
700
800
900
1000
1100
1200
1300
1400
1500
1600
1700
1800
1900
2000

大盂鼎（周代B.C.1000頃）

周代の歴史を傍証する大盂鼎

周代以降の歴史を証明する文物としては、当時すでに多くの古銅器が発見されていた。

たとえば、清の道光初年（一八二一～三〇）に陝西省郿県礼村（岐山の南麓、周原の地）で発見された大盂鼎には、内壁に二九一字の銘文が鋳込まれており、その内容と「二十三年祀」という紀年から、周の康王（殷を滅ぼした武王の孫）の二三年（紀元前一〇〇〇年ごろ）に制作されたことが明らかになっていた。

大盂鼎（周代B.C.1000頃）

大盂鼎の銘文（拓本）

林泰輔はどのような物証によって殷王朝の実在を証明しようと考えたのか？

林泰輔（1854～1922）

林泰輔「堯舜禹抹殺論に就て」

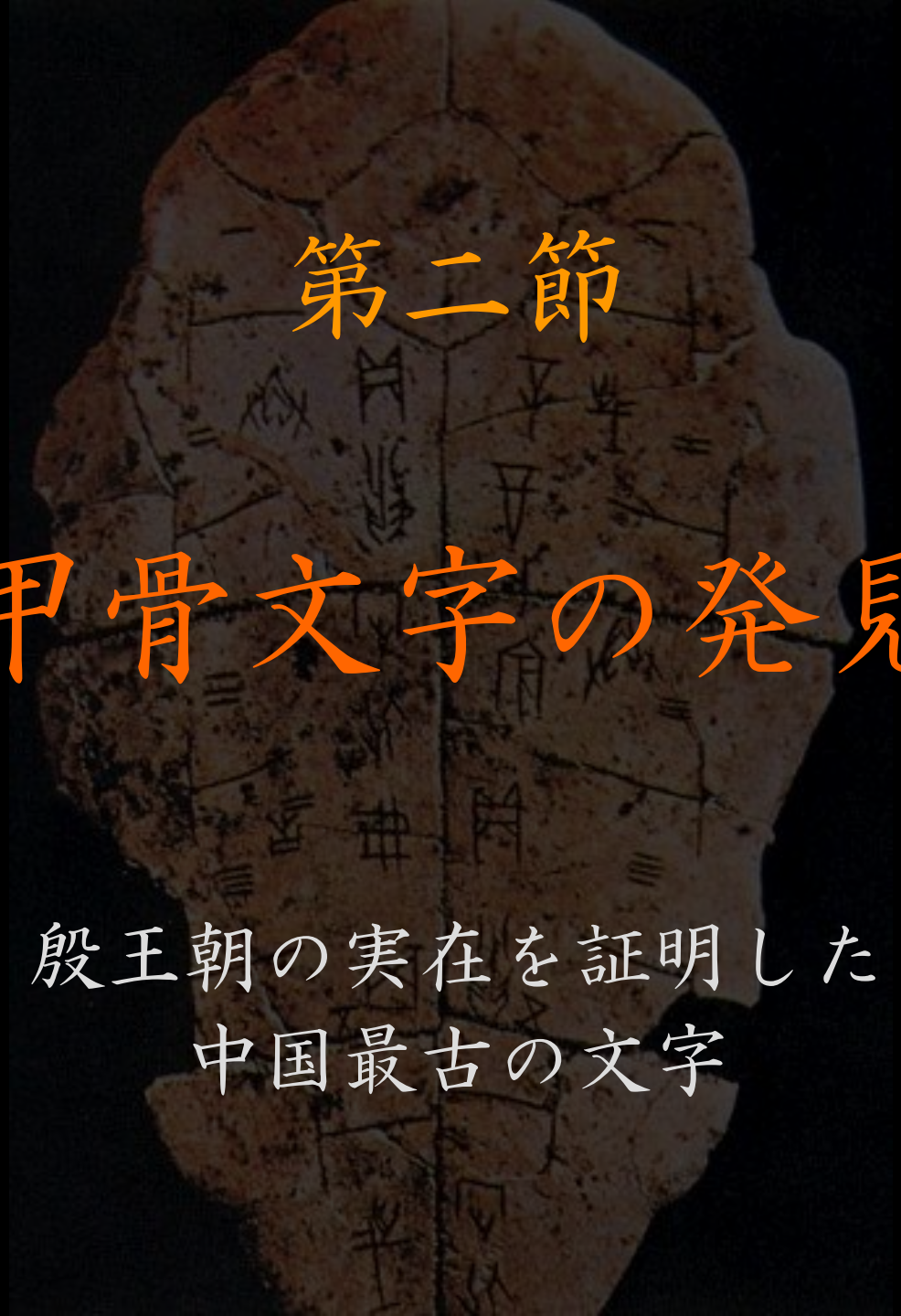
然るに近來、古銅器以外に於て有力なる證據の發見せらるゝものあり。そは清の光緒二十五年（明治三十二年、一八八九年）河南省にて發見せられたる龜甲獸骨に文字を彫刻せしもの是なり。

林泰輔（1854～1922）

亀甲に刻まれた甲骨文字

林泰輔（1854～1922）

CCTV 高清
故宫至宝 1



第二節

甲骨文字の発見

殷王朝の実在を証明した
中国最古の文字

甲骨文字の発見

白鳥庫吉と林泰輔が中国古代史の実在をめぐって激しい論争を始める十年ほど前、中国では歴史学者たちの認識を変える画期的な発見があった。

亀甲や獣骨に刻まれた謎の古代文字「甲骨文字」である。

亀甲に刻まれた甲骨文字

王懿栄（一八四五～一九〇〇）

甲骨文字を発見したのは、清末の文人官僚・王懿栄であった。

金石学（古代文字学）の学者でもあった彼は、一八九九年、マラリア治療のために購入した薬材に未知の古代文字が刻まれているのを発見した。

彼はこれを「殷商の故物」と考え、甲骨資料千余片を収集した。

王懿栄（1845～1900）

甲骨文字の発見者である王懿栄が、
その研究に名を残していないのはな
ぜか？

？

王懿栄（1845～1900）

王懿栄（一八四五～一九〇〇）

王懿栄が甲骨文字を発見した翌一九〇〇年、列強の侵略に抵抗する農民の秘密結社・義和団が扶清滅洋を唱えて外国人やキリスト教会を襲撃した。

王懿栄は弁理京城団練大臣として北京の防衛を命じられたが、八カ国連合軍（英・米・独・仏・露・日・伊・墺）によって北京が占領されると、自宅の壁に「主憂うれば臣辱じ、主辱しめらるれば臣死す」という辞世の句を残し、井戸に投身自殺した。

1850
60
70
80
90
1900
10
20
30
40
50
60
70
80
90
2000
清
1644～1912
中華民国
1912～49
中華人民共和国
1949～
江戸時代
1603～1867
明治時代
1868～1911
大正時代
1912～26
昭和時代
1926～89
平成時代
1989～
王懿栄、甲骨文字を発見（1899年）
義和団事件(1900)

紫禁城（現在の故宮）の中を行軍する八カ国連合軍（1900）

劉鶚（一八五七～一九〇九）

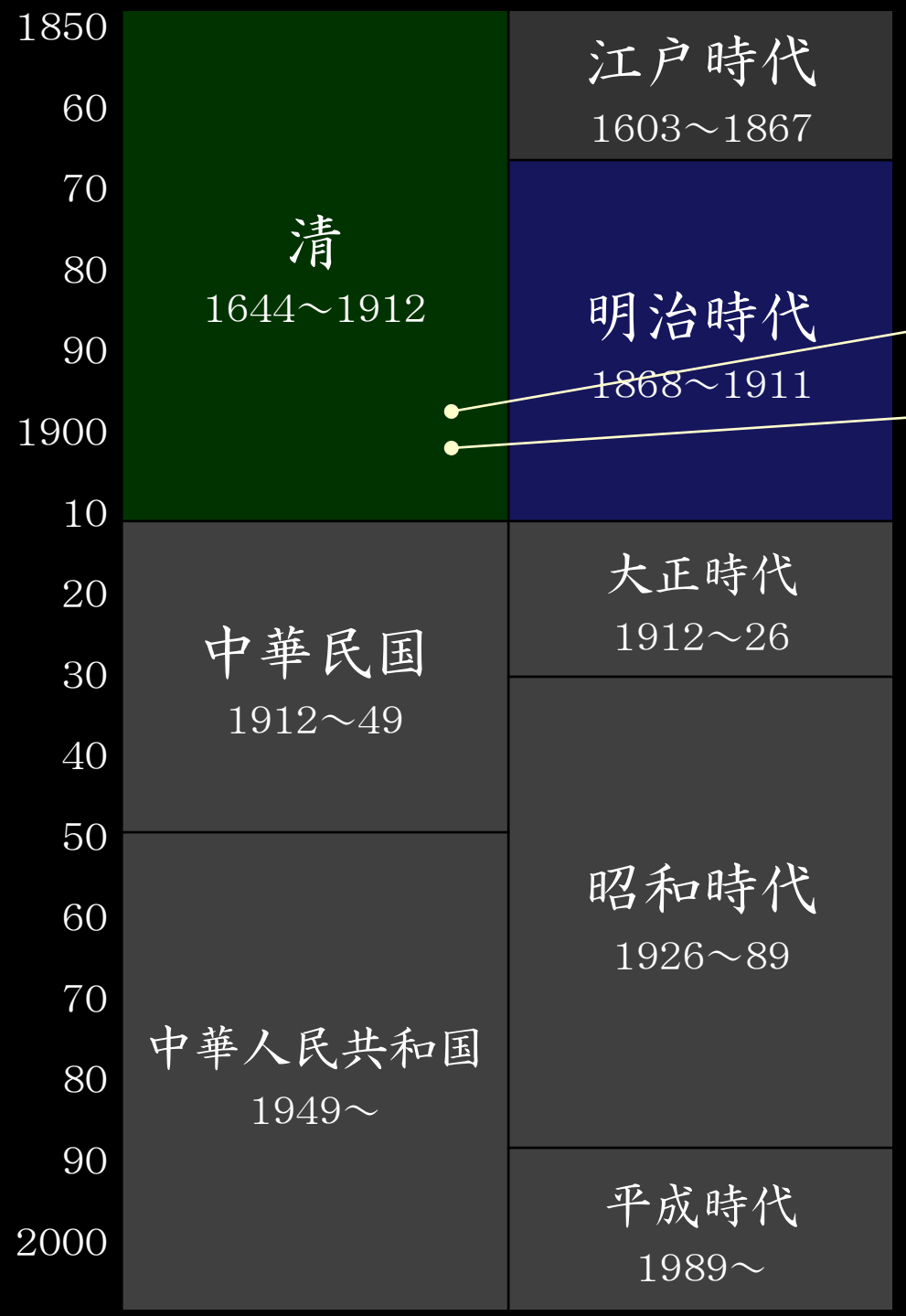
王懿栄が果たすことのできなかった甲骨資料の研究は、その幕客（私設秘書）であった劉鶚によって受け継がれた。

劉鶚（1857～1909）

『鉄雲蔵亀』（一九〇三年刊）

王懿栄が非業の死を遂げた後、その遺品となった甲骨資料を買い取った劉鶚は、自身が収集したものも含め、約五千点の資料の中から文字が鮮明なもの一〇五八片を選び、一九〇三年に拓本集『鉄雲蔵亀』を刊行した。

甲骨文字はこうしてはじめて世に広く知られることになった。



王懿栄、甲骨文字を発見（1899年）

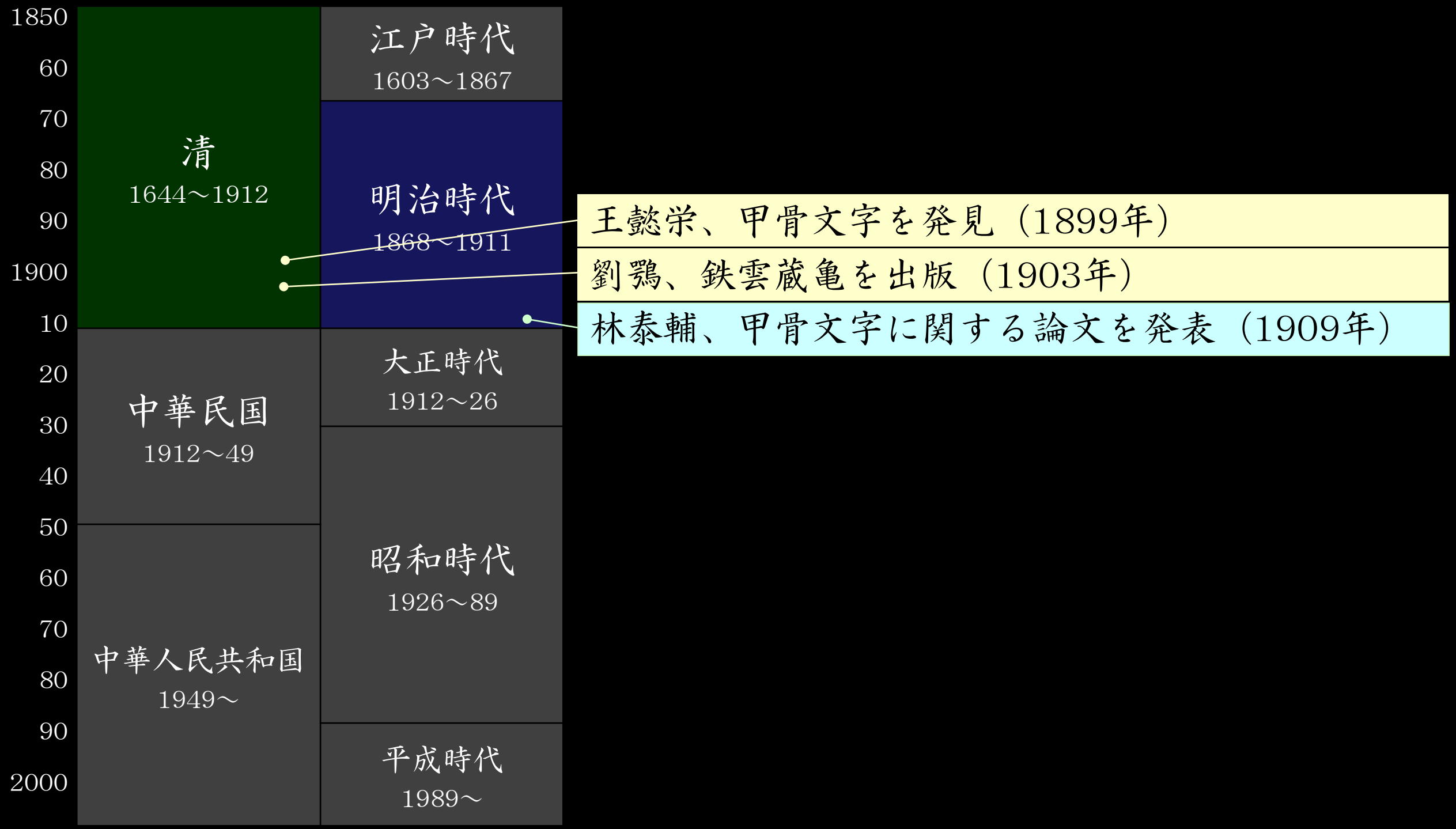
劉鶚、鉄雲蔵亀を出版（1903年）

甲骨資料の紹介

劉鶚の『鉄雲蔵亀』は出版当初、その真偽が疑われていたが、これにいち早く注目したのが林泰輔であった。

林は一九〇九年(明治四二年)、『史学雑誌』に「清国河南省湯陰県発見の亀甲牛骨に就きて」を発表し、『鉄雲蔵亀』を精査考証して、甲骨資料が中国古代史を研究する上で貴重な物証であると指摘した。

林泰輔（1854～1922）


1850
60
70
80
90
1900
10
20
30
40
50
60
70
80
90
2000
清
1644～1912
中華民国
1912～49
中華人民共和国
1949～
江戸時代
1603～1867
明治時代
1868～1911
大正時代
1912～26
昭和時代
1926～89
平成時代
1989～
王懿栄、甲骨文字を発見（1899年）
劉鶚、鉄雲蔵亀を出版（1903年）
林泰輔、甲骨文字に関する論文を発表（1909年）

劉鶚（一八五七～一九〇九）

王懿栄を始めとして、甲骨資料に関わった人には不幸な死を遂げた人が多い。

劉鶚は義和団事件の際、北京の難民救済のため、八カ国連合軍と交渉して太倉の政府米を難民に与えた。これが政府米の私売に当たるとして、一九〇八年（光緒三四年）に両江総督の弾劾を受け、新疆ウルムチに流刑となり、翌年、病死した。

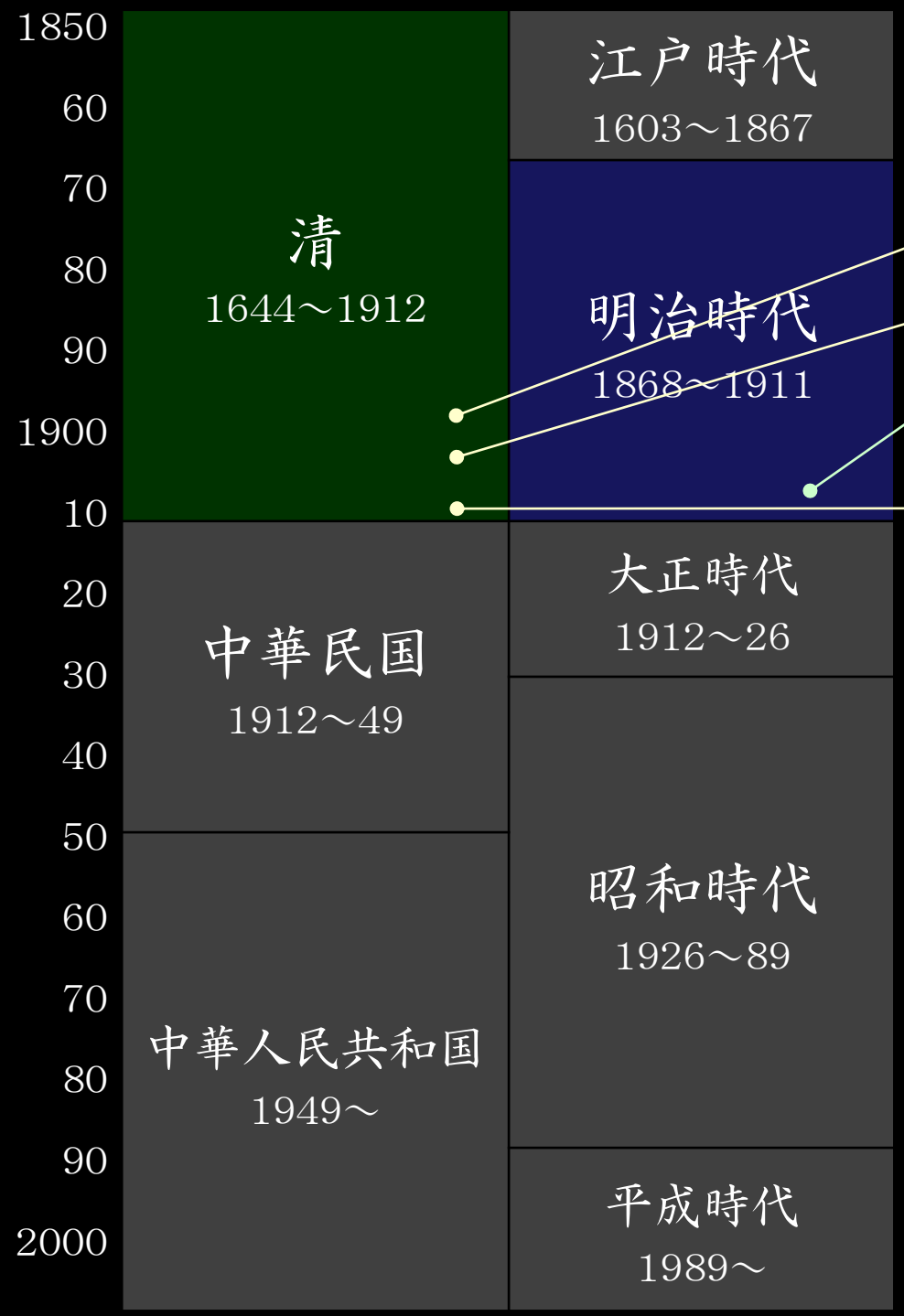
劉鶚（1857～1909）

羅振玉（一八六六～一九四〇）

劉鶚に甲骨資料の出版を勧めたのは羅振玉だった。一九〇一年、上海で劉鶚から王懿栄旧蔵の甲骨資料を見せられた羅振玉は、劉鶚に拓本をとって刊行するよう勧めた。

甲骨資料の出土地について、劉鶚の『鉄雲蔵亀』は河南省湯陰県としていたが、羅振玉は一九〇九年、自ら現地に赴き、真の出土地が河南省安陽県小屯村であることをつきとめた。

羅振玉（1866～1940）



王懿栄、甲骨文字を発見（1899年）

劉鶚、鉄雲蔵亀を出版（1903年）

林泰輔、甲骨文字に関する論文を発表（1909年）

羅振玉、真の出土地を発見（1910年）

CCTV 高清
1968
故宫至宝 1

第三節

殷墟の発掘

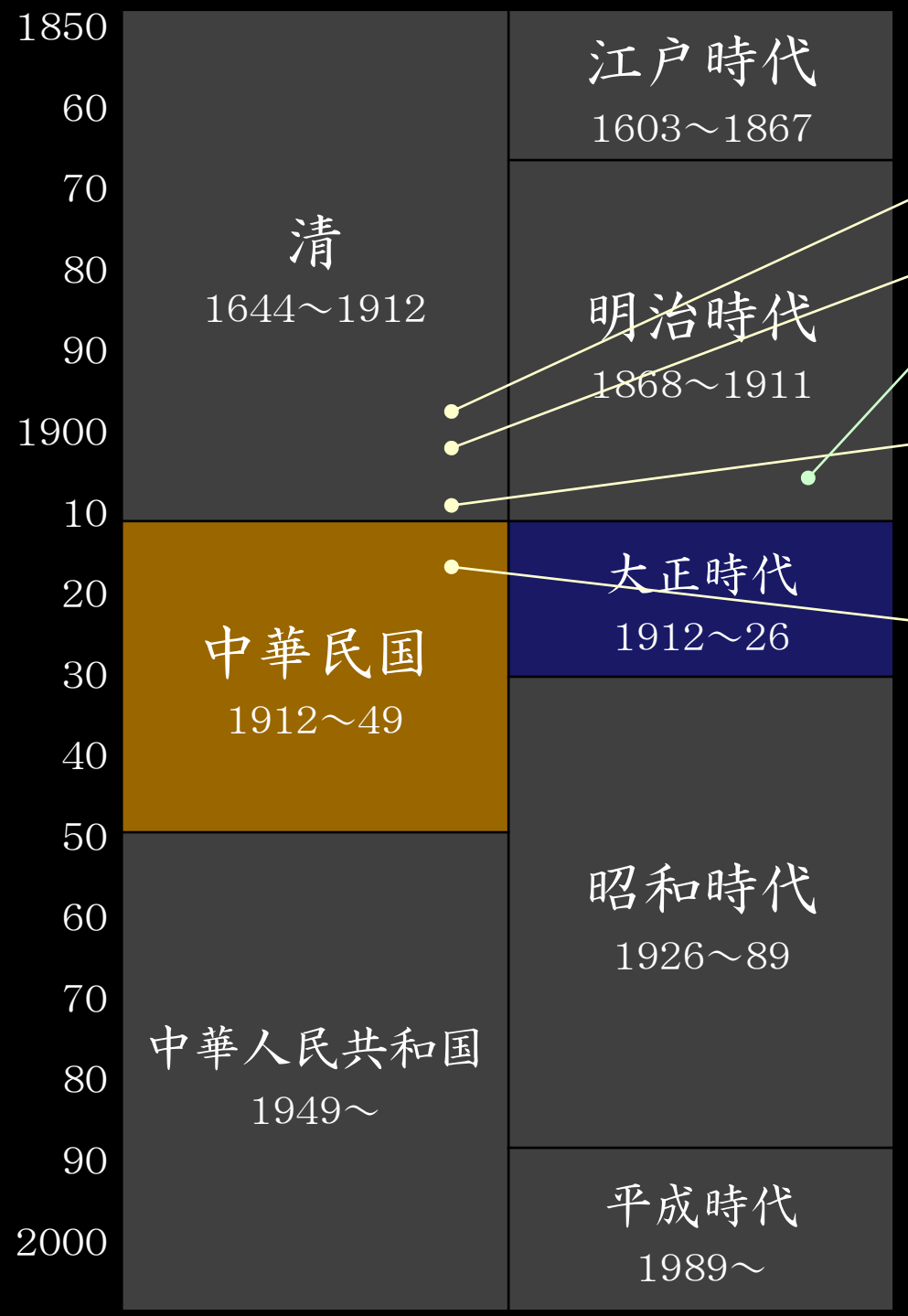
現代によみがえった殷王朝

王国維（1877-1927）

王国維（一八七七-一九二七）

羅振玉を助けて甲骨資料の整理と研究に従事したのが、羅の学生であり、娘婿でもあった王国維だった。

王国維は甲骨文字に刻まれた王の名が、史記殷本紀などに見える殷王朝の系図と一致することを明らかにし、それが殷王朝の謎を解き明かす第一級の史料であることを証明した。



王懿栄、甲骨文字を発見（1899年）

劉鶚、鉄雲蔵亀を出版（1903年）

林泰輔、甲骨文字に関する論文を発表（1909年）

羅振玉、真の出土地を発見（1910年）

王国維「殷卜辞中所見先公先王考」（1917年）

(前辞)甲申の日、占いを行った(占い師の)殻が聞いた

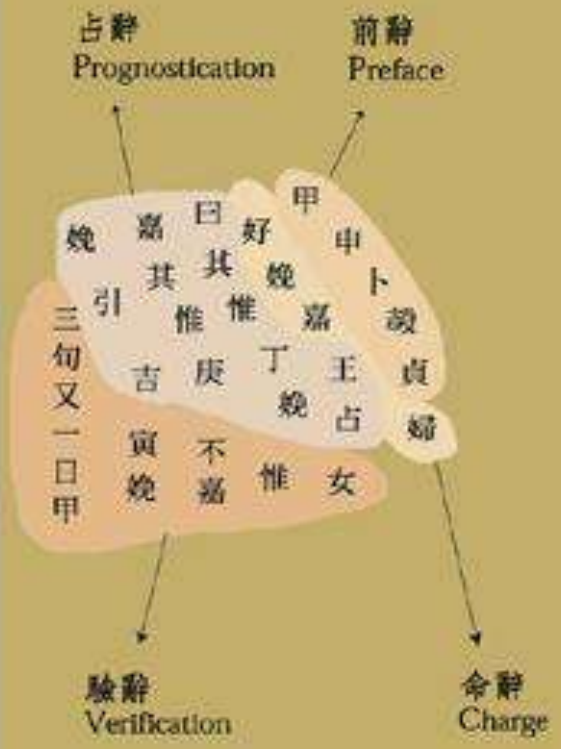
(命辞)婦好＊の出産は吉でしょうか？
＊殷王朝第22代帝王武丁の妃

(占辞)王は占って言った。「丁の日に生まれれば大吉、庚の日に生まれれば吉だ」

(験辞)三十一日後の甲寅の日に出産、女子が生まれた

殷墟文字丙編247

辭例完整之甲骨
（殷墟文字丙編247，現藏於中央研究院歷史語言研究所）



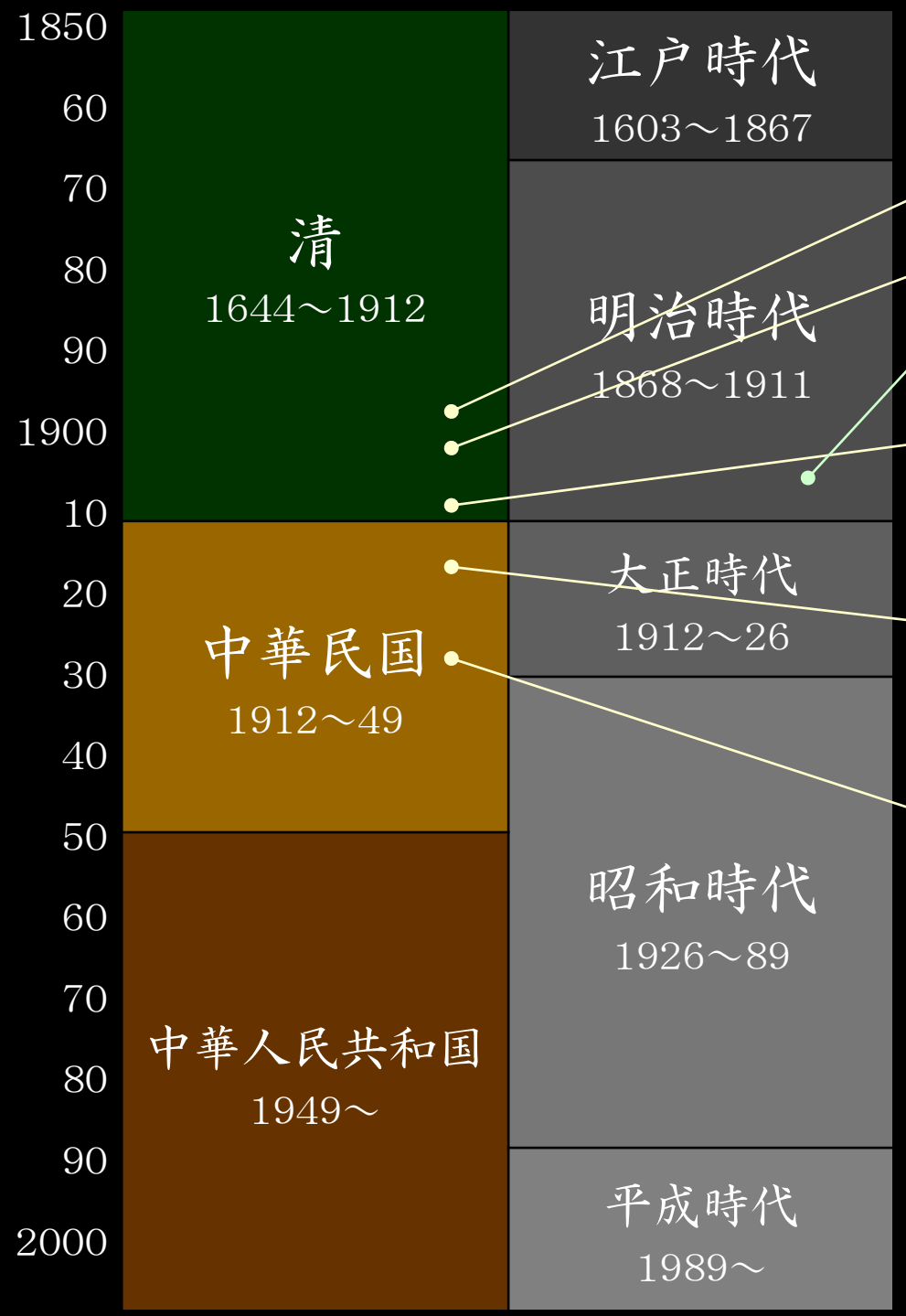
正問之例

甲申這天占卜，殼問說：婦好要分娩了，好嗎？
王根據卜兆預言說：如果是在丁日分娩，很好；如果是在庚日分娩，吉利。
經過三十又一天，婦好在甲寅日分娩，不好，生了女生。

甲骨資料の真の出土地が明らかになり、さらにその解読によって中国の古典が伝える殷王朝の実在が証明されると、中国はある国家事業を開始した。

その国家事業とは？

？



王懿栄、甲骨文字を発見（1899年）

劉鶚、鉄雲蔵亀を出版（1903年）

林泰輔、甲骨文字に関する論文を発表（1909年）

羅振玉、真の出土地を発見（1910年）

王国維「殷卜辞中所見先公先王考」（1917年）

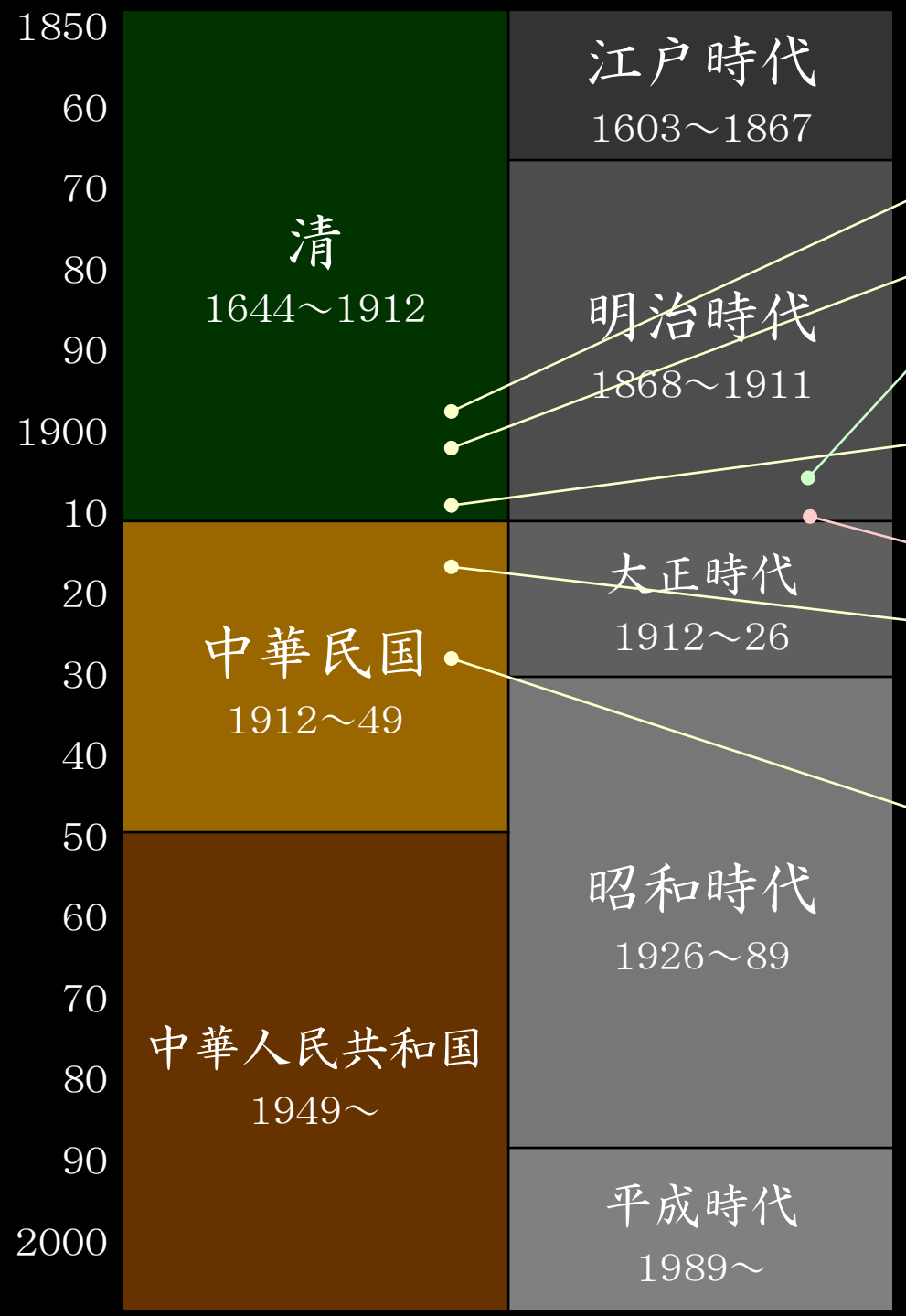
殷墟の発掘調査開始（1928～37年）

CCTV 高清
故宫至宝 1

堯舜禹抹殺論論争

白鳥庫吉（1865～1942）

林泰輔（1854～1922）



王懿栄、甲骨文字を発見（1899年）

劉鶚、鉄雲蔵亀を出版（1903年）

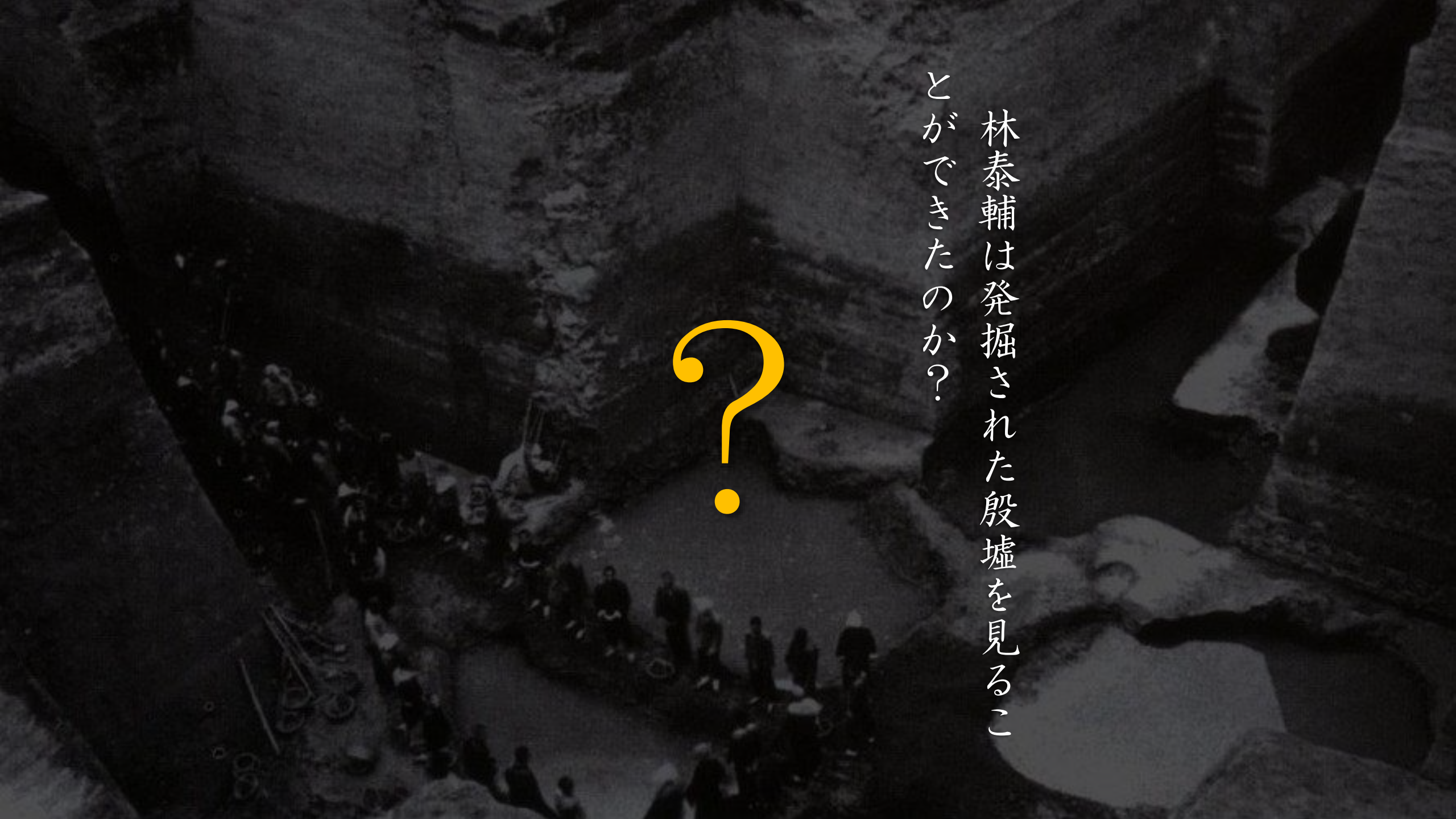
林泰輔、甲骨文字に関する論文を発表（1909年）

羅振玉、真の出土地を発見（1910年）

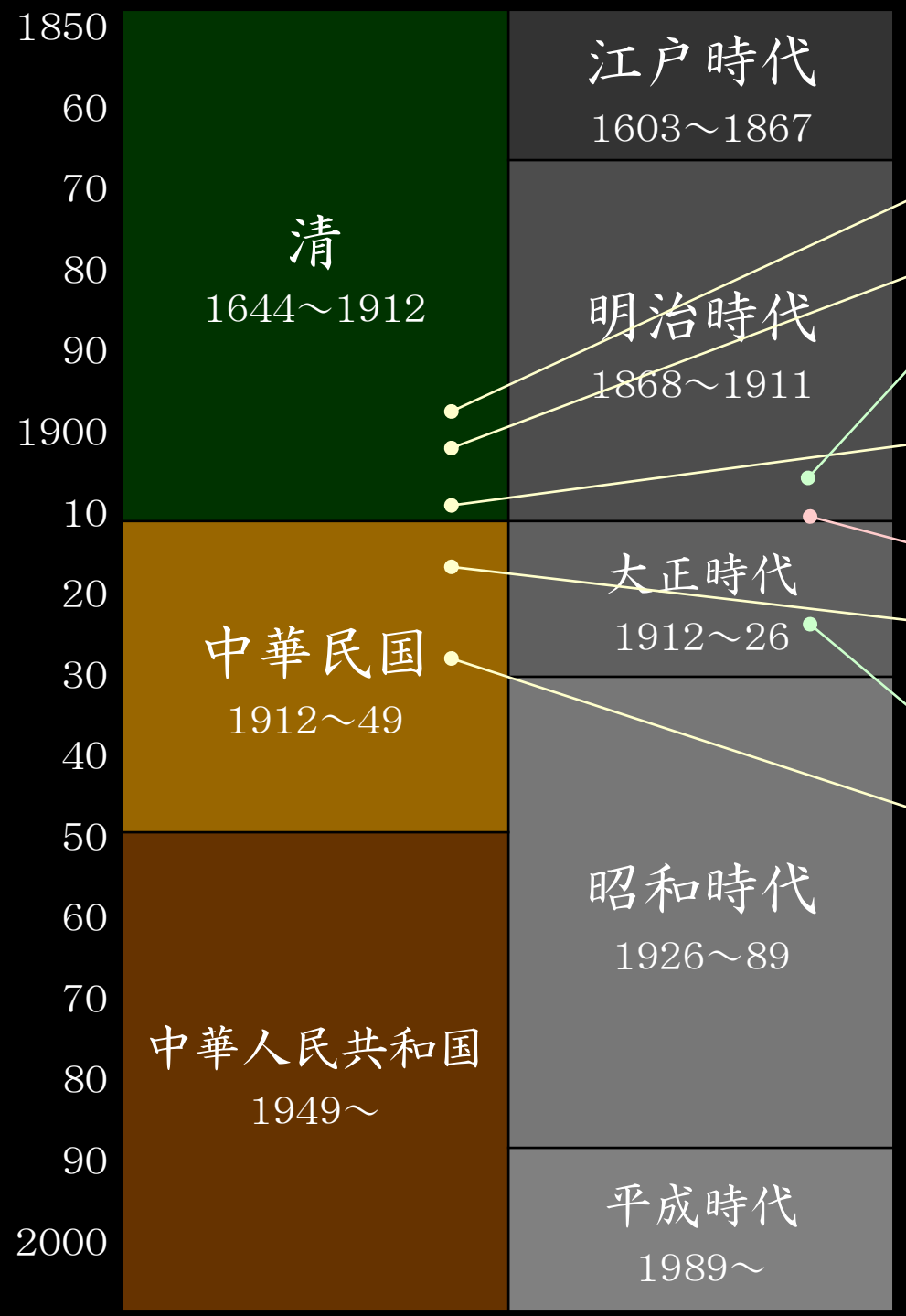
堯舜禹抹殺論論争（1911～12年）

王国維「殷卜辞中所見先公先王考」（1917年）

殷墟の発掘調査開始（1928～37年）



林泰輔は発掘された殷墟を見ることができたのか？



王懿栄、甲骨文字を発見（1899年）

劉鶚、鉄雲蔵亀を出版（1903年）

林泰輔、甲骨文字に関する論文を発表（1909年）

羅振玉、真の出土地を発見（1910年）

堯舜禹抹殺論論争（1911～12年）

王国維「殷卜辞中所見先公先王考」（1917年）

林泰輔、没（1922年）

殷墟の発掘調査開始（1928～37年）

実現しなかった夢

林泰輔は一九一八年の河南省安陽市での第一次調査の後、二一年に再度調査の準備を進めていたが、一九年に起こった五四運動の後、日中関係が悪化したため、調査は実施できず、二二年にこの世を去った。

二十世紀最大の考古学上の発見といわれる殷墟の発掘の六年前のことであった。

林泰輔（1854～1922）

林泰輔が後学の徒に残した言葉

林泰輔は、最後の論文「支那上代の研究資料について」の中で、学問のあり方についてこう述べている。

林泰輔（1854～1922）

林泰輔が後学の徒に残した言葉

支那上代の文籍と（甲骨資料など）他の資料とを比較対照して之を討究せば、種々の事柄に於てその一致せしものを見出すことは決して難事に非ざるなり。元来、何等の関係なく別々に各方面に伝りしもの、かくまで一致することは、即ち当時の真相を伝ふるものにて、実に確乎たる憑拠を数千歳の後に遺したるものといふべし。

林泰輔「支那上代の研究資料について」

林泰輔（1854～1922）

林泰輔が後学の徒に残した言葉

古代の文籍豈悉く後世の偽託ならんや。世の論者宜しく眼界を闊大にし、文籍に就ては表裏両面より精密なる観察をなし、又博く資料を文籍以外に求め、参伍錯綜して之を考覈（こうかく）すべし。徒に空想的仮説に耽りて快を一時に取ることは、たとひ其の説巧妙なりとするも決して後世の識者を欺くことは能はざるなり。

林泰輔「支那上代の研究資料について」

林泰輔（1854～1922）

「真実のみが勝利する」

〔解説〕

英国の植民地支配から独立を勝ち取ったインドがいまも掲げる標語に、古代印度哲学の言葉「真実のみが勝利する」がある。

「脱亜論」が唱えられ、アジア蔑視の風潮が広まる中、林泰輔は中国の古典を信じ、中国の研究者が新たに発見し、研究を進めていた甲骨資料を物証とすることで真実を明らかにし、白鳥庫吉との論争に勝利したのである。

林泰輔（1854～1922）

世界文化遺産に登録された殷墟

殷墟は2006年、世界文化遺産に登録され、いまも広大な遺跡として保存されている

まとめ

■甲骨文字の発見と解読により、中国文明圏の文字である漢字は、殷王朝が現在の河南省安陽県に都を移した約三三〇〇年ほど前にすでに誕生していたことが明らかとなった。

■甲骨資料に刻まれた文字は、現在知られているだけで約四五〇〇種類ほどあり、その半数の二〇〇〇字ほどがすでに解読されている。

■羅振玉、王国維らによる甲骨資料の整理・研究と、それに続く殷墟の発掘により、殷王朝の実在が確認された。

参考文献

- 平川祐弘『マテオ・リッチ伝１』（東洋文庫一四一、平凡社、一九六九年）
- 陳舜臣『中国発掘物語』（講談社文庫 1991）
- 阿辻哲次『図説漢字の歴史』（大修館書店 1989）
- 江上波夫編『東洋学の系譜』（大修館書店 1992年、林泰輔と白鳥庫吉の評伝を収める）